

2003年5月9日 キリスト教研究所主催公開講演会  
「アメリカのキリスト教原理主義と  
イラク戦争」の報告

中山 弘正

5月9日の6時から白金礼拝堂に於て、上記の講演会が開催された。参加者約120名。

アメリカ・イギリス軍のイラク侵攻は少し前にほぼ「終了」し、復興とか新政権づくりが問題となっている時期ではあるが、企画の準備そのものは、3月末から始められていた。2人の講師は、たまたま、「1942年生れ、早稲田大学卒」という共通点もおありであったが、2人ともに実に良く準備され、まとまったお話で大いに勉強になった。

(1) 油井義昭氏(長津田キリスト教会)は、「アメリカを動かすキリスト教原理主義とは何か」と題して、米国では「英独などと比較してもキリスト教的観念が政治の舞台に多く現れる」のは何故か、を序として「アメリカのキリスト教原理主義の起源と変遷」を3つの時期に分けて話された。第1期は、1920年代。20世紀の初め頃から「社会的福音」を唱えるリベラル派の方が多かったが、5分の1程度のキリスト者は「聖書全体を神の言葉」とする「原理主義」の立場をとった。第2期は、1970年代頃までで、この間に1940年代から原理主義のグループが「戦闘的分離主義グループ」と「穏健なグループ」に分かれた。後者が「福音派(エバンジェリカル)」で、前者が強烈な反共産主義、対話拒否を特徴としているのと比較すると、後者は対話を拒まず、リベラルとの対話もしなくてはなかった。1970年代頃にはこの福音派も政治に進出し、公立学校での祈りを支援したりもした。第3期は1980年代でモラル・マジョリティというグループの形成、テレビ伝道師による活発化などがあり、原理主義の力はソ連のアフガン侵攻

を反共主義の立場から非難するレーガン大統領を押し出した。

続いて、父・子ブッシュ大統領とキリスト教原理主義の親密な関係にふれ、彼らの「選民思想は第2時世界大戦に突き進んだドイツ的キリスト者(ユダヤ人排斥)と似て」いて、危険だ、とし、氏自身の属する「福音同盟(エバンジェリカル)」などはこれらを否定し、イラク戦争にも反対している、と結ばれた。

(2) 丸山直起氏(本学法学部教授)は、「ネオ・コン」などのアプローチがいわゆるユダヤ人差別を強めてはならぬ、と前置きした上で、アメリカ・ユダヤ人社会の変容—伝統的に民主党支持が圧倒的であったのに、近年急速に保守化・共和党寄りが強まっている—の原因を語られた。2001年現在、アメリカのユダヤ人人口は約615万人とされる。ところが、1965年から見ると、ニューヨーク州では彼らの他都市・郊外移住などで250万人から160万人に減り、逆にフロリダ州などでは13万から62万人に急増した。これは、彼らが全体として富裕化したことの結果でもありと見られる。在米ユダヤ人にとり「イスラエル」国家の存在は「絶対的に重要」で、強く支持しており、「アメリカ=イスラエル同盟」が在り、また「9.11」以後、「アメリカはイスラエルとなった」(パレスチナのテロがアメリカでも現実となった)とさえ感じられている。ただしブッシュ大統領らはイラク戦争の後、イスラエルに圧力をかけ、パレスチナへの譲歩を迫るだろうからそのことで、米国ユダヤ人との対立が発生する可能性がある。2004年11月の大統領選での動きが注目される、と結ばれた。

講演後、30分ほど質疑応答があった。講演はテープに記録されており、油井氏のレジュメなど希望者はキリ研まで。秋学期には、イスラム原理主義についての似た形の学びを企画したいと考えている。

(AD2003.5.21.)

(なかやま ひろまさ キリスト教研究所所長)